



一橋新聞部
〒186-8601
東京都国立市中2-1
一橋大学西キャンパス
学生会館別館1F

編集長 亀田英太郎
印刷 ウェブプレス
http://hit-press.org/

新人記者募集中

三菱地所と共同研究契約締結

東本館に交流拠点設置

本年9月より稼働予定

3月17日、本学はプレスリリースにて、三菱地所との間で「データ駆動型社会（\*注1）における空間の価値創造に関する共同研究契約」を締結したと発表した。また4月19日には、学外報道関係者向けの記者会見及び、ソーシャル・データサイエンス学部・研究科（以下、SDS）教員らによるトークセッションが行われた。

本共同研究契約は、本年4月のSDS創設と連動するもの。SDSが学部3年生以上を対象に開講予定のPBL演習（\*注2）にて三菱地所と協働するほか、東本館に交流拠点を整備し、学生発スタートアップの促進を図る。契約期間は5年だが、随時更新して継続的なプロジェクト運営を目指す方針だ。

4月19日の記者会見では、中野聡学長、三菱地所の中島篤執行役社長らが登壇した。中野学長は、時代に合わせて社会問題を解決できる人材を



1階に設置予定の、コモンエリアの完成予想図。開放感を重視し、カフェスペースを設置するなど、利用者の会話や交流を促進するようなデザインになっている（三菱地所（株）提供）。

育成することが本学の使命であるとした上で、「三菱地所には、日々集積される膨大なデータと、東京丸の内エリアなどでの多様な人々が交流できる拠点づくりのノウハウがあり、一橋大学にとって理想的なパートナーだ」として、本共同研究契約の意義を強調した。

本共同研究契約に関連するプロジェクトのうち特に注目されるのが、本学国立キャンパス東本館に開講予定の交流拠点だ。東本館は1929年に建設され、兼松講堂とともに国の登録有形文化財に指定されている。新設される拠点は、東本館のロマネスク調建築の要素と、現代的な要素の融合をコンセプトにしたデザインが特徴。東本館全体が大幅に改装され、会話や交流のためのコモンエリア、研究の

ためのラボラトリーエリア、PBL演習などで使用予定のラウンジエリアが設けられる予定だ。本交流拠点は、学生、教員、民間企業との関わりを密にし、学生発のスタートアップにつながることを目的とする。ブースごとの仕切りを取り払い、研究拠点となるラボラトリーエリアのすぐ近くにSDS教員の研究室を置くなど、空間設計の面からも利用者の緊密なコミュニケーションを後押しする。さらに、実際に起業に着手したスピーカーを招いてのイベントや、三菱地所が提携する他大学との協働なども検討しているという。

本拠点の設置目的について、記者会見後のトークセッションに登壇した七丈直弘教授（本学SDS）は「スタートアップの夢を現実にするには、教員・民間企業・他の学生とのコミュニケーションを通して、一般には得られない情報や人的ネットワークを手に入れることが必要。多様な人々の偶発的出会いを促し、学生に様々な可能性を提示できるような環境づくりを目指したい」と語った。また、同じくスピーカーを務めた檜山敦教授（本学SDS）は、本拠点のさらなる活用法として、「自分の作ったアプリケ

SDS 新入生インタビュー
阪本大知さん（SDS1）

今年度4月より、本学に「ソーシャル・データサイエンス学部・研究科」（以下、SDS）が開校され、本学の5学部新体制が始動した。社会科学とデータサイエンスを融合した教育研究を行うSDSの設置により、社会科学の総合大学としての本学の教育がさらに発展することが期待される。学部設置一年目となる今春には、学部第一期生として67名、研究科修士課程第一期生として22名が迎えられた。今回、SDS学部新入生の阪本大知さん（SDS1）に、志望した経緯やSDSでの学びへの期待について話を伺うことができた。

高校時代から情報やAI、データサイエンスに興味があったという阪本さん。高校時代には「野球とデータサイエンス」というテーマ研究に挑戦したことがあるそう。「日米のプロ野球リーグについて、野球選手の評価方法や、どういった選手が評価される傾向にあるのか」という分析に、様々な指標のデータを用いながら取り組んだ。「この経験を通して、データサイエンスへの興味が増す深まったと思う」と、阪本さんはSDSを志望したきっかけを振り返る。また、阪本さんは高校では理系だったが、人文社会分野にも興味を持っていたという。そのため、社会科学とデータサイエンスを組み合わせて学ぶことができるカリキュラムが本学SDS特有の魅力であると感じたそう。SDSを第一志望と心に決め、阪本さんはこの春推薦入試で念願の合格を手にした。

そんな阪本さんがこれからSDSで学んでいく中で特に楽しみにしている科目の一つは、「AI入門」。現在主に心を寄せているAI技術やデータサイエンスを、社会科学と結びつけてどのように実社会へ応用できるかということを専門的に学びたいと考えている。また、経営学や金融、哲学など、他学部で扱われるさまざまな教育科目への興味も尽きないという。「ソーシャル・データサイエンス」という研究領域に身を置くことには、どのような意義があるのか。本紙の質問に対し、阪本さんは「社会科学だけを学んでも、データサイエンスの知識がなければ、理論や知識をうまく現実実践できないかもしれない。同様に、データサイエンスの知識のみを持っていても、社会に関する知見がなければ、データ分析の結果がどのような意味を現実社会において持つのか理解しづらいのではないかと語る。だからこそ、社会科学とデータサイエンスを一緒に学ぶことの意義は大きい、と自身の考えを話してくれた。

インタビューの締めくくりに、これからの大学生活への抱負について尋ねた。阪本さんは「第一期生で、さらにSDS学部の唯一の推薦合格者であるというプレッシャーを感じることもある」と緊張感を漏らしながらも、「その分期待に応えられるように努力しようと思う」と、学びへの熱意をにじませながらコメントしてくれた。

容量無制限
企画欲 取材欲 執筆欲 写真欲 編集欲
友定隆
一橋新聞部

# 2022年度学位授与式挙行 全学部合同実施は4年ぶり

3月17日、兼松講堂にて2022年度学位授与式が挙行され、学部991名、大学院642名が卒業した。学部学位授与式が全学部合同で行われたのは2018年度以来、4年ぶりのことである。また、卒業生の家族などの来校も許可された。

中野聡学長は式辞で「我々は、持続可能な人類社会の発展と地球環境の両立に対して責任を果たすことが求められている」と語り、「一緒に世界を救いましょう」と卒業生に呼びかけた。

また、本学卒業生で、ジェンダー法学会理事・理事長などを歴任した辻村みよ子氏（昭53博法）が祝辞を述べた。日本におけるジェンダー平等の現状について言及し、「自分を信じて最良の道を選んで力強く歩んでほしい」とエールを送った。

学士学位記受領者総代は戴雨希さん（商）が務め、「自分の夢を実現すると共に、未解決の社会課題にも目を向け、解決に貢献する所存だ」と意気込んだ。

【齊藤丈一郎】



当日の国立キャンパスの様子。卒業生やその家族など、多くの人々がキャンパスを訪れた。

# サークル紹介、雨天決行 新歓期に賑わい戻る

3月25日と26日の二日間、新入生歓迎委員会の主催で国立キャンパスにて対面でのサークル紹介が行われた。サークル紹介は、新型コロナウイルスの流行により2020年度以降オンラインで行われており、対面開催は4年ぶりとなる。

今回のサークル紹介には総勢125団体が参加。各団体は各教室で説明会やパフォーマンスを行い、新入生へ自らの魅力をアピールした。当日はあいにくの雨空で、野外でのパフォーマンスは中止となったものの、キャンパスは説明会に参加する新入生と、呼び込みをかける在校生であふれた。

対面再開が4年ぶりとなることから、勧誘をする在校生側にも対面新歓の経験が乏しく、各団体手探りでのサークル紹介となった。一橋大学管弦楽団で新歓を担当する井上弘誠さん（法2）は「コロナ前に作成されたマニュアルを参考にはしたが、飲食の提供などコロナ前はできたことができないので、どうすれば新入生の関心を引けるかについては不安があった。また、部員全員が対面新歓初体験というところもあり、ビラ配りや新入生の情報集めにおいてミス

# 2023年度入学式挙行 SDS 設置で、新たなスタートへ



入学式当日の、中野学長による式辞の様子。SDS 設置により、本学が新たなスタートを切ったことを強調したうえで、本学の学生として社会問題の解決に資するよう人材となしてほしいと、新入生たちを激励した（提供：本学広報課）。

4月2日、令和5年度本学入学式が行われた。新型コロナウイルス感染症の影響により、2020年度から昨年度までは学部別での実施であったが、今年度は社会状況を踏まえ、4年ぶりに全学部合同の入学式が実施される運びとなった。

中野聡学長は式辞において、本学が今年度、実に72年ぶりの新学部としてソーシャル・データサイエンス学部・研究科修士課程を開設したことに絡めて、同学部・研究科創設の目的・意義を述べるとともに、今年度入学式の特別さを強調した。最後に、環境問題をはじめ、私たちが取り巻く周囲が変化する現代を「人新世」と称し、時代に対応するための学問の在り方に考えをほせるよう学生たちに求めた。

【田村英慈】

もあつた」と、対面でのサークル紹介の難しさを振り返る。そのうえで、「ミニゲームや定期的なアンサンブル演奏など新たに考えたことが功を奏し、多くの新入生がブラスに足を運んでくれた。これから新入生と会える機会がどんどん増えると思うので、楽しみつつ全力で頑張りたい」として、これから続く新歓活動に対する意気込みを語ってくれた。

【亀田太郎】



サークル紹介当日の様子。雨天の中、様々な団体が正門付近で呼び込みをかけ、新入生たちに自団体の魅力をアピールした。

# 「一橋大学ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン推進宣言」発出

## ダイバーシティ推進室の取り組みは？



ダイバーシティ推進室の概観。推進室は、東プラザ1階に設置されている。

近年、多様性を尊重する風土が社会で形成されつつある。そんな潮流の中で、本学も今年3月、「一橋大学ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン推進宣言」を発出した。また本学には、多様性の尊重される大学づくりを推進する機関である「ダイバーシティ推進本部」と、その執行機関である「ダイバーシティ推進室（以降、推進室）」がおかれている。本紙では、先述の宣言の発出に伴い、具体的な活動について、推進室を取材した。

先述の宣言は、多様性の尊重、公平性の確保、包摂性の実現の3つを掲げたもの。さまざまな属性の人々が差別を受けられることなく、その個性を尊重され、快適に活動できる場としての大学づくりを目指す。ダイバーシティ推進本部内容は具体化する活動が期待される。

推進室は本学の東プラザ1階に位置しており、子育てと両立する研究者や学生のためにも、おむつ交換台や授乳室を設置している。スタッフが2名常駐し、平日は9時30分から16時30分まで開室しており、現在でも多くの学生・教職員が利用している。また、ベビシッター利用支援事業では大学がベビシッター利用補助制度の窓口となる。また、本学では育児以外の様々な多様性を持つ人々に対する事業にも取り組む。例えば、国籍・文化・宗教の多様性を尊重するために、今夏には「個人の信仰に基づき礼拝をおこなう場所」として、礼拝堂を設置する計画だ。

今後の活動について、推進室は「多様性尊重のための取り組みは当室だけで完結することはできず、各部署との協力が必要だ。当室は取り組みのハブとしての役割を果たしたい」と意気込む。また、学内の多様性確保のためには、推進室の存在が利用者以外にも広く知られる必要があるとの意識のもと、教育プログラムと連携して積極的なダイバーシティ啓発活動を模索していく考えだ。

最後に本学関係者に対するメッセージをいただいた。推進室担当者は「ダイバーシティ推進室は、フリーサロンやメンタリングなど、参加型の企画も実施していますので、まずは気軽に見学に来て、皆さんの声をお届けいただけましたらと願っております」として、学生に対し、推進室の活用を呼び掛けた。【友定隆】